

弥生人の原郷と日本語のルーツ：サンスクリット起原説

梶 慶 輔*

1. はじめに

日本語のルーツに関しては明治時代に外国人類学者によりウラル・アルタイ語族説が提出されて以来多くの説が出されてきたが未だに解決していない。本稿では筆者が停年退官（2002年）後研究を続けて来た日本語の「サンスクリット起源説」を紹介する（拙稿：ポバール会記録2004, No.125；ICCA 2005, Feb～2010, Marの7回；きんか2009, No.5；2012, No.8；繊維と工業2013, No.2；2014, No.1）。言語はそれを話す民族と切り離すことが出来ない。それ故最初に日本人のルーツについて触れた後日本語のルーツについて述べる。

2. 日本人のルーツ

人類の移動ルート調べる科学的手段として、現在DNA遺伝子の多型分析法が用いられている（崎谷満著「DNAでたどる日本人10万年の旅」2008参照）。これはDNA塩基のうち比較的置換の起こり難い遺伝コード（ハプログループ）の突然変異を分類の基準としている。この方法には母系の先祖をたどるミトコンドリアDNA分析法と父系の先祖をたどるY染色体DNA分析法の二つがあるが、両分析法による人類移動ルートの結果が必ずしも一致しないので現在ではY染色体分析法の方を重視している。また、民族の特徴の一つとして主な血液型を付記するが確定している訳ではない（S. D. & L. J. Lawler 著「血液型の遺伝」1974；松本

秀雄著「日本人は何処からきたか」1992）。ただ、私見では熱帯地方（O型）、温帯地方（B型）、寒帯地方（A型）が元来の適応型ではないかと考えている。

最初に、日本人の移動ルートについて最近の研究に従って概説しておく（小田静夫監修「日本人の源流」2001；篠田謙一著「日本人になった祖先達」2007；中谷力著「科学者が読み解く日本建国史」2014）。

モンゴロイドは遅くとも6万年前にアフリカを出発し約5万年前頃東南アジアに到達した（血液型はアフリカ人のO型を維持）。これが**南方系モンゴロイド**である。他方、西アジアから北上して中央アジアに移動した集団が現れる（血液型はB型に変化）。彼らはマンモス（名前とは異なり大きさはインド象程度）を追って北上し、約3万年前頃には極寒の地シベリアに到達した。これが**北方系モンゴロイド**（血液型はA型に変化）である。

(1) 縄文人のルーツ

縄文人（Y染色体DNAタイプはD2系統）は南方系モンゴロイド（O型）で原郷は東南アジアである。当時、地球はヴェルム氷期にあり海岸線は低くインドシナ半島・インドネシア諸島・フィリピン諸島を含む広大な地域が地続きでスンダランドと呼ばれる亜大陸を形成していた。しかし、約2万年前の氷期終焉によりこの亜大陸の大部分が海中に没し、多くの集団が

*京都大学名誉教授

北方を目指した。その際、中国大陸を北上した集団はシベリアから沿海州・樺太・北海道を経て本州に到達した。これが「北回りの縄文人」である。この間、中国の漢民族（血液型 B）との接触により血液型は B 型に変化した。因に、漢民族は中央アジアからシルクロード沿いに東進し黄河上流域に達したと思われる。彼らには蒙古斑がないのでモンゴルから直接南下したとは考えられない。それに対して、海上を北上し琉球列島から直接九州・本州に到達した集団が「南回りの縄文人」であり血液型は O 型を維持した。

(2) 弥生人の原郷

弥生人（Y 染色体 DNA タイプは O2 系統）は元々バイカル湖（ブリヤート共和国）東南側のウラン・ウデを中心とする地域に定住していた北方系モンゴロイド（O2b 系統）でビルマ民族の一派と推定される。紀元前数千年頃チベット族と共にモンゴルを南下し中国の黄河上流域に到達した。ここからチベット族はチベット高原に、ビルマ族はチベット高原東側の深い溪谷を流れる河川に沿ってさらに南下しビル

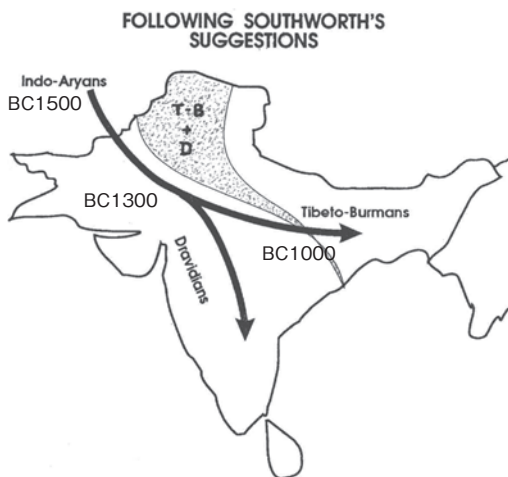


図1 チベット・ビルマ民族の居住地域とアーリア人の侵略ルート

マ（ミャンマー）に到達した。中国の民族研究者はこの河川地域を四川民族走廊と呼んでいる。実際、周の時代（BC1100 頃）には四川省に多くの倭族の国が林立していた（鳥越憲三郎著「古代中国と倭族」2000）。両民族の一部は、さらにインドのガンガー川（ガンジス川）流域に侵入した。両民族がこの地域に定住していたことはドラヴィダ語の研究者 F. C. サウスワースが言語層序学的研究で指摘している（図1 参照）。このガンガー川流域こそが弥生人（ビルマ民族）の原郷である。因に、日本語の「かは（川）」の語源はガンガー川の別名「カーパガー（Khâpagā）」（天空の川）に由来する。神話では天の川（銀河）「ナーカ・ナディー（Nāka-nadi = 天のガンガー）」が地上に流れ落ちるのをシヴァ神が受け止めて出来たという。ここで、天（heaven）を意味する「ナーカ」は「ナカ（中）」に音韻変化するので、日本神話の天初之神「天御中主」^{あまのみなかつし}の「中主」は「ナーカ・パティ（Nāka-pati）」（天の主）が語源で「神」を意味した。

3. 弥生人の大移動とアーリア人の侵略

BC1300 年頃インダス川上流域にアーリア人が侵入し定住した。その影響でガンガー川流域のチベット・ビルマ民族の言語もサンスクリットと融合しクレオール化が進んだ。しかし、その後アーリア人はガンガー川流域に再三侵略を行い先住民を追い出した。彼らは大移動を余儀なくされ弥生人は最終的に日本列島にやって来ることになる。

(1) 弥生人の第一波

BC1000 年頃アーリア人は人口増加による領土拡大のためチベット・ビルマ民族の定住するガンガー川上流域に侵略を開始する。このとき

チベット人はチベット高原にビルマ人(弥生人)は東に移動した。恐らく東南アジアから中国広東省・福建省を経て台湾に渡り、そこから琉球列島を北上、日本列島に到達したと思われる。これが弥生人の第一派である。彼らは当時インドで盛んであったシヴァ信仰を持っていた。

(2) 弥生人の第二波

BC800年頃になるとアーリヤ人はさらにガンガー川中流域に攻め込んだ。この地域は弥生人(ビルマ民族)の本拠(中心地はベナレス、古名カーシ)で肥沃な穀倉地帯が広がっていた。当時宗教もシヴァ信仰が衰え太陽信仰(ヴィシュヌ信仰)に変化していた。彼らの逃走ルートは急を要したためチベット高原に逃れる方が安全であった。インドのダージリン地方からネパールとブータンの間にあるシッキム(レプチャ族の国)を通りチベット(古名:コンロン(崑崙))に逃れた。因に、「ぼたもち」は「ブータン餅」のことであり、安田徳太郎が主張した日本語のレプチャ語起源説(『万葉集の謎』昭和30)の根拠もここにある。彼らがチベットに滞在したことを伺わせる証拠は他にも幾つかある。例えば、チベット人は商才に長けており、彼らとの商取引にはチベット語の数詞が不可欠であった。**日本語の数詞**(イチ・ニイ・サン)がチベット語と非常に良く似ているのはそのためであろう。また、沖縄大学学長・新屋敷幸繁は著書「琉球歴史物語」(1976)で「隋の国の煬帝が琉球に遠征軍を送ったとき、コンロン人を通訳に使った」ことを指摘している。

その後、彼らはチベットから金沙江沿いを重慶へ、そこから長江沿いに上海付近に到達した。当時、中国は春秋時代(BC770~BC403)で弥生人は呉の国に集結した(鳥越憲三郎著「古代中国と倭族」2000)。呉は越(ヴェトナム人)

とは仲が悪く戦いばかりしていたが、共通の敵である楚(漢の前身)と戦う時には協力した。これが呉越同舟である。重要なことは、この地で**漢字を習得**したことである。このことは日本語の漢字の音が基本的に**呉音**であることから分かる。呉越は最終的に楚の国に敗れ、両民族は台湾から琉球列島沿いに日本列島に向かう。これが弥生人の第二波である。

4. 神道のルーツ

我が国の神社神道は弥生人の第一派が持込んだシヴァ信仰(BC1000年頃)と第二波が持込んだ太陽信仰(BC400年頃)からなる。両者を統合したと思われるのが宇佐八幡神社である。宇佐の語源は「ウッチャ・デーヴァ(ucca-deva)」(ヴィシュヌ神)で太陽神を、八は「パチ・ケチャラ(pati-khecara)」の略でシヴァ神を表す。幡は「マーン(mān)」で「礼拝する」という意味である。

シヴァ信仰の考古学的証拠は日本各地で発見される石棒で、シヴァ神のシンボル「リング Liŋga」(男根)である。我が国では「へのこ(辺野古)」と呼んだ。リングは嘗てご神体として大抵の神社に祭られていたが、明治政府の命令により殆どが破棄された(愛知県小牧市の田縣神社には残っている)。飛鳥の須弥山石もリングを表している。文献的証拠としては日本書紀神武紀の記述「日本は浦安の国…磯輪上の秀真国」がある。磯輪上は未詳とされているが、「上」は訓から「神」の誤訳と考えられ「シヴァ(Siva)神」を意味する。「ほつま」は hotri-mat の音韻変化「ホ_Aチ_Bマ」に対応するから秀真国は「ホートリ神官の(所有する)国」となる。浦安の国も「hotri-vūrya(ヴールヤ)」の略で「ホートリ神官に選ばれた国」である。ここで「ホートリ」というのはバラモン教の供

儀を司る祭司のことで、国も彼らの所有物とされた。事実、マヌ法典に「世界に存する如何なるものも悉くバラモンの所有なり」とある。また、記紀文献の原書と言われる「ホツマツタエ」は「ホートリ神官の伝承」という意味である。

太陽神（スーリヤ）のシンボルは亀であるが、飛鳥池遺跡の亀形石は将に太陽神を表している。また、太陽神は（○◎⊕卍）などの記号で表すこともあるが、これらは太陽神の乗る馬車の車輪を記号化したもので実物はインドのスーリヤ寺院に見られる。有名な青森の「ねぶた（naibuka）祭」では先頭の船形山車に卍の旗を立て大きな車輪や馬の造りものを乗せている。これは太陽神とその馬車を表している。王などの支配者が亡くなるとその霊は太陽神の船に便乗して月世界に行き、毎年9月の満月の夜に帰って来ることになっている。この祭はその儀式である。その際、「ラッセラー（ras-rākā）」という掛け声を発するが、ラスは「大声で叫べ」の意で満月の日を管理する女神（または太陽神の船）「ラーカー」を讃える叫び声である。また、宮崎県日向国最大の西都原古墳さいとほらの名前「さると」は「サヴィトリ Savitṛī」（夜明け前の太陽）の音韻変化で「死者の再生」を願うものである。王の霊は太陽神の船（船形埴輪）に便乗して月世界に行くが、その船を浮かべる海が「ばる（原）」（bharu = the sea）なのである。

5. 日本語のルーツ

言語は征服者や文化の高い側のものに短期間に一挙に変化するが完全に置き換わる訳ではない。語彙は上位民族の言語（上層言語 superstrate）になるが、文法の基本は自己民族の言語（基層言語 substrate）を維持するからである。ただし、文法体系の詳細は独立した別のものになる。これをクレオール言語

（creole language）という。前述の如く日本語はビルマ語（ミャンマー語）（基層言語）とサンスクリット（上層言語）から発達したクレオール言語と考えられるから**日本語の語彙はサンスクリット起源**と結論される。このことは極めて多くの語彙について確認出来る。それらは日常語（身体語を含む）・方言・俗語・擬態語・幼児語・地名の他、歴史・宗教（神道）・記紀文献・万葉集等々あらゆる分野に渡る。その際、両者の間には「**音韻対応の規則**」が成立しなければならない。日本語ではさらに「**語尾省略の規則**」が不可欠となる。これは長い単語の語尾を省略し意味の変化に関係なく語頭の1~3音節で表すもので、ビルマ語の影響である。

以下に音韻対応の規則を両言語のアルファベットについて検証しておく。

(1) **母音の対応** サンスクリットには14の母音 [a, ā, i, ī, u, ū, ṛi, ṛī, lī, lī, e, ai, o, au] がある。ただし、「lī」の音は殆どない。ここで、上にバーを付した英字は長音を、レ点を付した英字は特殊な「反舌音」を表す。一方、奈良時代の日本語すなわち上代語（万葉仮名）では「い、え、お」に通常音（A）と特殊音（B）の2種類が有り、母音は全部で「あ・い_A・い_B・う・え_A・え_B・お_A・お_B」の8つあった。両者の対応は、(a) 長音が短音化し長短の区別がほぼ消滅、(b) リ音（ṛi, ṛī, lī, lī）が特殊音「い_B」に変化、(c) 二重母音「エイ（e）、アイ（ai）」が「え_A、え_B」に、「オウ（o）、アウ（au）」が「お_A、お_B」に変化した。すなわち、奈良時代の「母音」の音韻対応は、(a, ā → あ) (i, ī → い_A) (ṛi, ṛī, lī, lī → い_B) (u, ū → う) (e → え_A) (ai → え_B) (o → お_A) (au → お_B) となる。ここで注意すべきは、通常音（A）と特殊音（B）が橋本進吉の同定した通常音（甲類）と特殊音（乙類）に一致せず多くが逆転していることで

ある。橋本の甲乙の同定に関しては砂川恵伸も「上代音韻のミステリー」(2010)の中で疑問視している。

(2) **子音の対応** サンスクリットの子音には清音と濁音があり、そのどちらにも無気音(ka, ga など)と帯気音(kha, gha など)がある。日本語ではそれらは全て無気音に変化した。子音の主な音韻対応は、(ka, kha → か) (ga, gha → が) (ca, cha, śa, sha, sa → さ) (ja, jha → じ) (t'a, t'ha, ta, tha → た) (d'a, d'ha, da, dha → だ) (ñā, ña, na → な) (pa, pha, ha → は) (ba, bha → ば) (ma → ま) (ya → や) (ra, la → ら) (va → わ, ま) (ñ, n, m → ん) となる。ここで、va 行は通常ワ行に変化するが、マ行に変化する場合もある。例えば、スズメ(雀)やツグミ(鶇)の「メ(ve)」や「ミ(vi)」で、いずれも「鳥」を意味する。因に雀は「スズメ su-jña-ve」で「良く知られた鳥」の意。

6. サンスクリット語源の実例

最後に日本語のサンスクリット語源の面白い例を紙面の許す限り挙げておく。因に、弥生人の祖国ビルマからは「美しく輝く(su-bhānu)」^{すばる}昂星が見えるという。

[あ(a-) : 否定の接頭辞]

原子 atom = not cutting の場合の「a = not」と同じ。

あかん : 「カン kam = well, yes」の否定で「アカン a-kam = ill, no」。京都では柔らかく「あかん vi-kam」(different from yes) という。vi = difference (異) の意。

あほ(阿呆) : 「a-pogañd'a」の略。pogañd'a (子供) の否定で「子供じゃないんだから」の意。なお、**馬鹿**は「バカ baka, vaka」(サギ)が語源で「いたずらっ子(悪ガキ)」の意。サギ(鷺)

は用心深く賢い鳥で敵を欺くことから「化かす」や「詐欺師」の語源にもなった。

浅ましい : 「サマ sama」(同じ)は「様」の語源で「心変わりしない」。この否定が「あさま a-sama」(心変わりする)。ただし、**浅間山**は「シアマ śama」(平穏な)の否定で「アシアマ a-śama」(不穏な)が語源。「不穏な山」という意味。

(その他の否定) な (禁止の助詞) : na = not, no, **ない** (否定の助動詞) : na-hi = by no means.

[間投詞]

「アレ are ; アレレ arere」(驚き), アハハahaha (喜び), イ_Bー ĩ (子供の悪態語)

[擬音語]

カーカー kākā (鳥), **メー** me (山羊), **カラカラ** kala-kala (乱雑音), **パタパタ** pat'apt'ā (ハタメキ), **フーフー** phupphu (喘ぎ), **フラフラ** phurāphurāya (際どい状態), **ブラブラ** : bhram が語源で「あてもなく歩き回る, 揺れる」の意。これから**ぶらつく**, **ぶら下がる**, **ぶらんこ**などが派生。

[動詞]

行く : い_Aく (ikh, ikh; iñkh), い_Bく (ĩ, ři; rikh), ゐ_Aく (vi) など多数の語がある。萬葉仮名の「伊久」に対応。そのため「伊」はA, B (甲・乙)のどちらにも用いられた。**浮く** ukh, **打つ** ut'h, üt'h, **語る** kath, **勝つ** katth, **去る** cal, **掏る** cur, **立つ** tat' など。

[名詞]

(身体語) 目 mecaka, 鼻 phaña, 毛 keśa, 顔 kapola, 歯 hānu, hālu, 乳 cuci, 腰 kosht'ha,

肩 katsavara, 手 tala (古語はタ), 腹 pat̄ira (食物) 米 komala-tañḍ'ula, 酢 cukra, 御浸し śrīta-śīta (茹でて冷ましたの意), 蕪 Vira (古名ミラ). 瓜:「ウルワル urvāru」(瓜破)の略. 大阪市営地下鉄谷町線に喜連瓜破駅^{きれんりわり}が有るが, 古代の瓜破村は瓜の産地で弘法大師にも進じたという.

(地名・山名) 富士山:古くは「ハラミ山(蓬莱山)」と言った. この語源は parama (最高峰) または paramēśvara (シヴァ神) と考えられる. 後に信仰の山となり富士山になった. フジ pūj は「礼拝する」の意.

琵琶湖:「びわ(琵琶)」は「ビンヴァ bimba, vimva」(瓢箪)で「ひょうたん湖」の意. 「ワ va」と「バ ba」の発音はしばしば交替する. 「湖」は「クーマ kūma」の音韻変化. 楽器の琵琶は形が果物の枇杷に似ているからで「ビルヴァ bilva」(枇杷)が語源.

平野:「ヒラ(平) hira」は「帯, ベルト」という意味で, 「ヌ(野) snu」は「平坦な山頂・山の稜線, 台地・高原など」をいう. したがって, 平野は帯状の台地. 比良山は帯状に続く山, 枚方^{ひらかた}は帯状の細長い湾.

(その他) 須賀利^{すがり}の御太刀^{おんたち}:「すがり」は sugrīva (美しい柄をもつ) の略, 太刀は tachidira (ヒップ ta に吊るす剣) の略で権威の象徴. 伊勢の神宮徴古館所蔵.

皮と樺:皮の語源は「カヴァチャ kavaca」. 「カバ bhūrja」(birch)や「ブナ bhūrjjajātiyo」(beech)の木は皮を利用した. 日本では前者を「皮の木」の意味でカバ(樺)と呼んだ. 英語ではブナの木^{の皮}が文字を書くのに使われたため book の語源になった.

芸と芸者:芸は「ゲ_B gai」(歌うこと), 芸者は「ゲ_A シュヌ Geshnu」(プロの歌手・俳優). 両者の「芸」の音は異なる. このため萬葉仮名「芸」は A, B (甲・乙) のどちらにも使われたと思われる.

路地と囃子:路地^{ろうぢ}は「ロウディン rodhin」で「行き止まり」の道(袋小路)をいう. 京都では「ろうぢ」という古い発音を残している. 囃子^{つし}は「抜け路地^{ろうぢ}」とも言うが, 「ゾシュチャラ duścara」の略で細くて「通り抜けるのが難しい」道をいう.

車(久流末・久留万): kulmala, kurmala. 元来は鏃を矢柄(軸棒)に取り付けるための環状部品名. このクルマラを円状に並べ矢を放射状に差し込んで飾りとしたのが矢車. 現在では鯉のぼりの竿の上に付けられる. また, クルマラは「結合部品」であることから, 「結合する」という意味にも用いられた. 肩車(子供の足を首に差込む)や車塚(前方後円墳の古名で円墳を方墳に結合した塚)はその例である.